

「^{クレド}信仰宣言」

のカテケーシス

(II) 「父のひとり子……………」

主イエズス・

キリストを信じる」 (1)

竹山 昭

新約聖書から現在に至るまで、キリスト教にとっておそらくもつとも根本的な問いは、「あなたたちはわたしを何者だと言うのか」(マルコ8・29と併行箇所)というイエズス自身の問いかけに示されている。キリスト教はこの問いに対する応答いかにかかっているものであり、この応答の独自性のゆえに、ユダヤ教からその袂を分かつことになったのである。

新約聖書が伝えるもつとも簡潔な、そしておそらくもつとも初期の信仰告白の形がこの問いへの応答の形をとっているのも、ごく当然のことであろう。「イエズス・キリスト」「主であるキリスト・イエズス」、「神の子イエズス・キリスト」などは、みなこの種の信仰告白を表している。現代のキリスト者たちも、「父のひとり子、おとめマリアから生まれ、苦しみを受けて葬られ、死者のうちから復活して父の右におられる主イエズス・キリストを信じます」と告白するとき、あのイエズスの問いに自分たちの答えを表明しているわけである。

一、おとめマリアから生まれ、
苦しみを受け、葬られ……………」

「イエズスはだれか」という問いに対する応答としては、「父のひとり子、主イエズス・キリストを信じます」で十分

と思われるが、「信仰宣言」の第二項には、さらにイエズスのできごとのいくつかが述べられている。そのために、第二項が長くなり、前後と比べて形式上バランスを崩すほどである。教会がそうしてまで宣言しようとしているものは、いったいどんなことなのだろうか。

新約聖書においては、ナザレのイエズスが一人の本当の人間であったということは自明のこととして前提されている。マリアという母親から生まれ、飢えや渇き、喜びや悲しみを味わい、疲れ、怒り、愛し、そして苦しみ、死をも経験したことは自明のこととして述べられている。したがってイエズスがわたしたちと同じく身体をもって実在したことは特に議論も検討もされる必要はなかった。

ところが、次第に教会がユダヤ的環境からまったく異質のヘレニズム精神に満ちた世界へとふみ入ったとき、現在では「グノーシス」と呼ばれるようになった精神的運動からの危険に直面することになる。この思想は、「知識」によって、物質的世界の拘束から己を解放放たれることによって救われる、とする。その特徴は光と闇、善と悪、精神と物質、神と世界の対立という明確な二元論に立ち、身体や物質の救済ではなく、身体からの救済、物質からの救済を説く。

このグノーシスの影響を受けた人々は、キリストについて、実際の身体を受けたものではありえないとし、キリス

トの身体は見せかけのもの、ないし精霊的・天界的身体であると主張した。ニュアンスの違いはあっても、このような人々はキリストの身体の真实性を認めないところから、仮現論者と呼ばれている。

新約聖書中でも後期のものときされるヨハネの手紙(1ヨハネ4・2、2ヨハネ7)にはすでにこの種の考えへの対応がみられるが、二世紀初頭のアンチオケのイグナチオの手紙には表現こそ異なるが、イエズスの誕生、飲食、受難、十字架、死、復活が真実のものとして述べる方法で仮現論者との対決がみられる(トラリア人へ9、10)。この思想傾向は、その後も、中世紀を通じて教会を脅かしたことが、十五世紀半ばのフローレンス公会議の宣言がこの種の謬説を断罪していることからわかる。

現代では主義主張としてまかり通ってはいないとしてもキリストによる救いを霊化しすぎたり、イエズス・キリストの誕生を神々しい場面でおおったり、人間の生活のおよそ身体的、物質的な側面を低いものと見なしがちな形で、キリスト者の信仰生活に深く影響を残しているともいえる。

「古代教会の諸信仰宣言は、……イエズスの生涯のもっとも重要な事項、すなわち誕生、受難、死などを挙げることによって仮現論の謬説に対して素朴な、しかしきわめて意味深いやり方で対決している」(W・カスパー)。「信仰宣言」

の第二項に加えられたイエズスの生涯の事項は、したがってなによりもまず、イエズス・キリストが真にわれわれと同じ身体をもった一人の人間であることを宣言する。それによってイエズス・キリストが真の人間であったことを告白しているのである。キリスト教の用語でいえば、受肉の神秘、それがこれらの表現によって守られ、告白されていることになる。

現代のわれわれにとって奇異に思われ、キリスト者でない人々にとっては「信じ難い」と言われがちな「おとめマリヤより生まれ」(原文どおりには「処女マリヤより生まれ」という一句も、元来、いわゆる「処女懐胎」の事実を主張するのが目的で入れられたわけではない。それは否定されてはおらず、含まれている。しかしこの一句が目ざすものは、「イエズスが他の人間と同じものであることを強調するために」(W・カスパー)であった。キリストは天的身体を有し、それは神から直接造られたものであって人類と関係するものではない、と主張するグノーシスの一派に対処する必要からであったといわれている。その後の教会の宣言ではこの目的はいっそう明瞭にされている(「人間性においては神の母、おとめマリヤから」——五世紀のカルケドン公会議)。

受肉の神秘をめぐる教会の闘いは、教会の生死をかけた闘いであった。すでにヨハネは「イエズス・キリストが肉体をとって来られたことを告白する霊は、すべて神から出

たものです。イエズスを告白しない霊は、神から出たものではありません。これこそ……反キリストの霊です」(Iヨハネ4・3、IIヨハネ7も参照)と言い切っている。したがって受肉の神秘は、キリスト教を非キリスト教から区別するのみならず、キリスト教と反キリスト教を画する神秘なのであって、その真実性が否定されるとキリスト教は土台を失い、われわれの救いは崩壊する。

後日、このことは再びとりあげてみたい。

一、父のひとり子……

主イエズス・キリストを信じます

古くからの簡潔な信仰告白定式を示すこの文では、「イエズスをだれだと言うか」の問いに対して「キリストである」「主である」および「父のひとり子」という三つの表現で答えている。いずれも、イエズスの死と復活の後に使徒たちと初代教会のキリスト者たちが告白するに至ったものである。

説明するまでもないほどによく知られていると思われるので、簡単に述べておこう。

《イエズスはキリストである》

多くの人々がイエズス・キリストを固有の名前と考えて

いるが、本来「イエズス」のみがいわゆる固有の名前である。福音書でも、はつきりさせるために出身地名のナザレをつけて「ナザレのイエズス」とか、父や母の名をつけて「ヨゼフの子イエズス」と呼ばれているとおりである。

「キリスト」とは、旧約聖書やユダヤ人の言語では「メシヤ」という語のギリシア語訳で、意味は「油ぬられた者」というほどのものであった。旧約時代では王や預言者、大司祭などがその任につきとき油を注がれていた。次第にユダヤ人の伝統の中で、民の解放のために来る救い主を指して用いられるようになった。それが、イエズスの復活後「イエズスこそ本當の救い主だ」と悟った弟子たちがそう説いて回るようになり、次第にイエズスだけに用いられるようになったものである。

それゆえ、「イエズス・キリスト」は最も短い信仰告白なのである。あの、われわれが知っており、福音書が記す「ナザレのイエズスこそ唯一の、真の救い主」という信仰告白なのである。

《主(である)イエズス・キリスト》

同様に、「イエズスを「主」と呼ぶことは「新約聖書におけるキリスト信仰の起源、中心」であり、復活の際の信仰告白である。栄光を受けたキリスト・イエズスに対して全宇宙がひれ伏してささげるべき「イエズス・キリストは主で

ある」(ピリピ2・11)や「主よ来てください」(1コリント16・22、黙示22・20)などが示すように、おそらく典礼での呼びかけや栄唱の形でとなえられていたのであろう。それは旧約聖書で、神の名であった「アドナイ」をギリシア語に訳するときの用語であった。したがって、復活したイエズスを神と等しい尊称をもって呼ぶべき方として告白したものである。

新約聖書では、おん父をさして「神」という名を用いることがほとんどなので、「主」との尊称はイエズス・キリストに神と等しい尊厳と主権を実質的に表わしている告白定式であった。

《父のひとり子、イエズス・キリスト》

わたしたちには不思議なことであるが、新約聖書中ではイエズス・キリストを「神」という語で表わすことがきわめて少ない。「神」、それも定冠詞のついた形で出てくるところはほとんどいつも「父なる神」をさしている。むしろ、イエズス・キリストが神であることを聖書が知らないのではない。ヨハネ福音書は「イエズスはキリストであり、神の子である」(20・31)へ人々を導くために書いたのだというし、手紙の結びも、「かれは真の神、永遠の生命である」(1ヨハネ5・20)と結んでいる。パウロも(神の)「おん子」(ローマ1・3)と言う。

ただ、むしろもっと多く、そして通常の表現としては、「神の子」、「父のみ子」、「子」というような表現が用いられている。

やがて、仮現論者の出現の場合と同じように、イエズスが真の神とはいえず、その倫理的な生き方によって、神の子として「養子」とされた（エピオン派）というような主張に始まり、三世紀の著名なアリウスの謬説がイエズスの（ロゴスの）神性の否定に至る主張をかかげることになるに及んで、イエズス・キリストが真に神でなければわれわれの救いの土台が崩壊することになるために、次第に哲学的な考察が加わっていった、本質として神である、という明瞭な表現が固定することになっていく。その場合も「子として神である」ことはいつも守られてきた。

われわれの「信仰宣言」は、むしろ新約聖書の表現に近い形を用いている。そして、そのことは、ナザレのイエズスの生と死が、イエズスが子として神であるということの意味を地上で生きた姿に他ならないことに気づいていく神学の反省を引き出してくれた。

「父のひとり子」であるイエズス・キリストによって救われたわたしたちは、「ひとり子によって、ひとり子とともに父の子ら」とさねていく、それを生きることができるようになされたことがわたしたちの救いなのだということを、この信仰告白とともにいつも思い起こすことができる。

「父のひとり子がナザレのイエズスとなった」。そのイエズスの生と死と復活をとおして、父なる神はご自分をわたしたちに与え、わたしたちをご自分に招かれている。

こうした救済論的関心はイエズスがだれか、との問いに対する答えと、いつも不可分であったし、今もそうである。

（たけやま・あきら 鹿兒島教区司祭）

